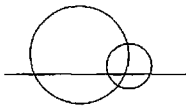


2007年度 豊橋市民大学トラム 愛知大学連携講座 (3回)



## 展示室での講義と見学

東亜同文書院大学記念センター  
ポストドクター **武井義和**

2007年10月20日(土)、第3回豊橋市民大学トラムは午後2時から1時間半にわたって、記念センター展示室見学会という形式で行われました。当日は30名ほどの参加者があったため、二手に分けることにし、東亜同文書院展示室は武井が、愛知大学史展示室は大学史事務室の佃隆一郎氏が担当し、45分ほどで見学者を入れ替えるという方法を採用しました。

東亜同文書院展示室では、まず孫文の協力者であった山田良政・純三郎兄弟について、孫文の書(「天下為公」、「至誠如神」)や、孫文と山田純三郎との間で使用された暗号表などといった、展示されている様々な資料について解説を加えつつ、兄弟の軌跡を説明しました。また、愛知大学の前身である東亜同文書院に関するコーナーでは、東亜同文書院創立の背景、書院の創立母体である東

亜同文会の説明から始め、歴代院長・学長の紹介、東亜同文書院の特徴である中国語教育や、学生同士の発音練習である「念書」について、教科書やパネルを用いて説明しました。そして、学生生活の集大成である大旅行について、パネルにして展示されている旅行コース図を用いてそのスケールの大きさを示し、大旅行を行った学生たちによって記された『調査報告書』が、戦前の中国を知る貴重な資料として注目されてきていることを紹介しました。

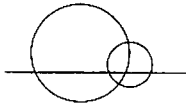
なお、愛知大学史展示室では愛知大学の誕生と創成期を中心に説明がなされました。

参加者たちは記念センターで展示されている資料に興味深げに見つつ、熱心に説明を聞いていました。



説明を聞く見学者たち

2007年度 豊橋市民大学トラム 愛知大学連携講座 (4回)



## 東亜同文書院からみた近代の日本と中国

東亜同文書院大学記念センター  
ポストドクター 武井義和

【武井】 皆さん、こんにちは。先週は大学記念館展示室で、実際に資料をご覧頂きながら説明を聞いて頂きましたが、90分間立ち放しでしたので、お疲れになったと思います。今日は通常の講義スタイルに戻りましたので、皆様お体を楽にして受講頂けると思います。

今回は東亜同文書院の歴史を見つつ、近代日中関係の中に位置付けて捉えていくことを試みます。逆に言えば、東亜同文書院を通じて近代日中関係史を見ていくことを試みたいと思います。しかし、40数年間の歴史をくまなく見ていくことには限界があるので、同文書院の主な出来事を取り上げることにしたいと思います。

まず、東亜同文書院の経営母体であった東亜同文会から話を始めます。1898(明治31)年に誕生した東亜同文会は、もともとは「東亜会」と「同文会」という2つの団体が合併して出来たものです。「東亜会」は1897年に誕生しましたが、清朝末期の立憲君主制を目指す改革派を会員に迎え入れ、孫文を支持・後援する会員もいるなど、政治色が強い性格でした。一方、「同文会」は1898年に誕生しましたが、こちらは政治色を廃し、日中間—当時は清国でしたので—日清間の経済交流の発展助長を期する、実務優先的な会でした。こうした2つの会が合併し、「東亜同文会」となったのです。この東亜同文会の初代会長を務めたのが、近衛文麿の父親の近衛篤磨でした。東亜同文会は綱領として「支那を保全す」、「支那および朝鮮の

改善を助成す」、「支那および朝鮮の時事を討究し実行を期す」、「国論を喚起す」ということを掲げました。

さて、東亜同文会の活動は、教育・文化活動が中心でした。もっとも、初期の頃は清朝の改革派との連携・連絡や、ロシアの旧満州進出に対して反対世論を喚起するなどの政治的活動も見られましたが、日露戦争後は教育・文化方面の活動が中心となっていきます。そして、そうした活動は、日中両国の友好、協力に必要な人材の養成が主眼となっていました。例えば、主な学校を2つ挙げますと、東亜同文書院が設立される1年前に、「東京同文書院」という学校が設立されます。「東亜同文書院」と比較すると、「亜」と「京」の一字しか違っていませんので大変紛らわしいのですが、この「東京同文書院」は中国人留学生が、高等教育専門学校へ進むための予備校でした。864名の中国人が卒業し、日本語を中心に算数・地理・英語などを教え、2年の課程でした。

そしてもう1つが、これからお話しする東亜同文書院です。最初は1900(明治33)年南京に設立されたので、「南京同文書院」と呼ばれました。しかし程なく義和団事件が発生し、政情不安になったために上海に移転し、翌年より東亜同文書院として再出発しました。

他に、朝鮮半島でも学校経営を行いました。日本の植民地となる過程で、数年間で中止されま

した。したがって、中国に関する教育活動が中心となります。

では、南京同文書院について次に見ていきます。南京同文書院が設立されるきっかけとして、まず近衛篤磨と両江総督劉坤一の会談（1899〔明治32〕年10月）が挙げられます。近衛はヨーロッパからの帰国途中、清国に立ち寄り、南京に有力政治家の劉坤一を訪ね、会談をします。その時の様子が「東亜同文会の趣旨を述べ、今回南京にも学校を設くるの考あれば、万事に相当便宜を与へられんことを望むと乞ひしに、（劉坤一は）同会の事は既に聞知して貴邦の交誼に感じ居れり、学校を南京に設けらるゝ事の如きは、及ぶ丈の便宜を与ふべし」と答へたり」と記されています。

そして、後に南京同文書院院長となる根津一が、設立主旨である「興学要旨」を劉総督に提出し、共感を得ます。この「興学要旨」は原文は漢文で文章が長いので、レジュメの2. (2) 南京同文書院設立（1900年）のところ、その書き下し文を出だし部分だけ引用しておきました。

「中外ノ実学ヲ講ジテ、中日ノ英才ヲ教エ、一ニハ以テ中国富强ノ基ヲ樹テ、一ニハ中日輯協ノ根ヲ固ム。期スル所ハ中国ヲ保全シテ、東亜久安ノ策ヲ定メ、宇内永和ノ計ヲ立ツルニ在リ（以下略）」。

この中で「輯協」とは「友好協力」、宇内永和は「世界永遠の平和」という意味があります。非常に壮大なスケールを感じさせます。

これにより、根津は劉と親交を重ね、妙相庵という寺院の境内の空き地を20年間借用することに成功しました。

しかし、開校しても学校には教員スタッフが満足に揃っていないという状況でした。授業は主に英語と中国語でしたが、午前中に授業が終わると午後にはやることなく、相撲を取ったり、境内の池に泳いでいる鯉を住職に内緒でとって食べつつ酒を飲むという状態でした。程なくして義和団

事件が発生し、南京の治安が悪化して流れ弾が飛んでくるようになったので、上海に避難しました。その避難先の上海で、東亜同文書院として再出発したのです。根津一は東亜同文書院でも初代・第三代院長を20年余り務めました。

東亜同文書院の始まりは中国側の理解と協力の上で成立したのであり、そのことは注目に値するのではないかと私は思います。

東亜同文書院は当初、ビジネススクールとして出発しましたが、1921（大正10）年に外務省管轄の専門学校となります。さらに1939（昭和14）年には大学に昇格します。さて、東亜同文書院が存在した40数年間を長いと取るか短いと取るかは、人により違いがあるでしょうが、東亜同文書院は全部で3回キャンパスを移転しています。それだけでなく、1913（大正2）年と1937（昭和12）年には長崎にも一時避難しておりますので、それも含めると合計5回移転しているわけです。お手元のレジュメには校舎名が書いてありますが、大変申し訳ないことにルビを付けておりません。ですので、校舎の変遷を地図で確認しつつ、あわせて読んでみたいと思います。

まず、地図で①とありますが、1901（明治34）年に桂墅里（クイシュリ）校舎が上海租界の南にできます。しかし、この校舎は1913（大正2）年に中国の革命で焼かれたので、②の赫司克而路（ハスケルロ）仮校舎に移ります。その後、③の虹橋路（ホンチャオロ）校舎が建設され、20年間存在しました。しかし、1937（昭和12）年に日中戦争の兵火で焼かれたため、翌1938年隣接する交通大学の跡地—交通大学は重慶に疎開していたので、その跡地—を借用して、④の海格路（ハイコーロ）臨時校舎として1945年まで授業を行いました（資料1を参照）。

しかし、特徴的なのは、上海のキャンパス全てが租界の外、つまり中国の領土内にあったということです。これは日中友好という理念を実現する

ためだったといえるのですが、戦後の日本では「不平等条約をもとに建てられた殖民学校だった」という認識が存在していました。

さて、東亜同文書院の建学精神ですが、これは「興学要旨」と「立教綱領」の2つがありました。「興学要旨」は南京同文書院のところでお話しましたが、この2つは根津一の起草によるものです。先ほどは申し上げませんでしたでしたが、南京同文書院開学に際して、「立教要綱」も作成されております。上海で東亜同文書院として再出発する際、それらは東亜同文書院の建学の精神となったのであります。この「立教綱領」も原文は漢文で長いので、書き下し文で出だし部分のみを引用してあります。

「徳教ヲ経ト為シ、聖經賢伝ニ拠リテコレヲ施シ、知育ヲ緯トシ、特ニ中国学生ニ授クルニハ日本ノ言語文章、泰西ノ百科実用ノ学ヲ以ツテシ、日本学生ニハ中英ノ言語文章及ビ中外ノ制度律令、商工務ノ要ヲ以ツテス。期スル所ハ、各自ニ通達自強シ、国家有用ノ士、当世必需ノオト成ルニ在リ。(以下略)」

この内容は、知育・徳育をあわせて教育し、教育は儒学の古典、知育は中国人学生には日本語・西欧学術、日本人学生には中国語・英語、中国・西洋の法律・制度・経済・商務などを教え、その目的は国家に有用、現代に必需の人材を養成する、というものです。

次に教育内容ですが、東亜同文書院はビジネススクールとして出発した関係で、商務科が中心でした。初期の頃は政治科や農工科もありましたが、やがて廃止され、一貫して存在したのは商務科だけでした。商務科ですので、経済に関する勉強をしたわけです。例えば、1930(昭和5)年頃のカリキュラム表を見ますと、経済原論、簿記、それから支那経済事情、商工経営などの科目があります。あと、同文書院で特徴的なのは、中国人教員が充実していたことです。彼らは中国語を担当していました(資料2を参照)。こうした同文書院

の教育を象徴するのが、大旅行でした。これは藤田教授が第1回目の市民トラムでお話になりましたし、先週の展示室説明会でも申し上げましたので、ここでは詳細に述べることを避けませんが、彼らが遺した記録は、現在大変貴重なものとなっております。

同文書院で学ぶ学生たちについてですが、彼らは県費生が中心でした。県費生は、各府県の選抜試験を受けた合格者が、府県の費用で派遣されるというものです。後には私費生も現れますが、やはり県費生が中心でした。学生たちは東亜同文書院に入学すると寮生活を送ることになります。彼らは寮でもに過ごす中で、強い絆で結ばれていきました(資料3を参照)。

また、東亜同文書院と中国人との関わりについてですが、例えば1920(大正9)年は東亜同文書院創立20周年であり、同時に根津一還暦の年だったのですが、これを記念する書が梁啓超、黎元洪といった当時の有力者から贈られております(資料4を参照)。これだけでなく、大旅行誌にも中国人による多くの揮毫がみられます。一例を挙げますと、清朝の皇族であった肅親王は第18期生大旅行誌に「奇聞壯観」という書を揮毫しております。一方で、学生同士の交流も見られました。1920年代には東亜同文書院と隣接する中国の大学である交通大学が、スポーツ交流試合などを行っていたというようなことが、最近の研究で明らかにされております。

ここまで、東亜同文書院の概観をお話しして参りましたが、東亜同文書院の近代日中関係史における位置付けについて、次に述べていきたいと思えます。近代史における東亜同文書院を考える場合、中華学生部を挙げる必要があります。これは1920年に中国人学生を対象として設置された学部で、1934(昭和9)年まで存在しました。この中華学生部が設置された背景には、第一次大戦後の欧米による中国に対する文化政策が挙げられま

す。先ほど触れた義和団事件で、列強諸国は清朝から賠償金を獲得します。しかし第一次大戦後、その賠償金を使って中国で学校や病院を設立するという動きが現れます。特に、アメリカは早い時期から賠償金を免除し、賠償金の一部で中国人がアメリカへ留学するための学校を設立し、多くの人を留学させるなどの活動を行いました。これにより、中国人の対米感情が良くなったといわれています。

日本も対中事業拡充を意識し、1918年3月第40回帝国議会で「支那人教育の施設に関する決議案」、「日支文化の施設に関する決議案」を議決します。これをうけて、同年5月外務省は東亜同文会に、「東亜同文書院の拡充および同書院に中国人教育のための附属実業学堂の創設」を命令しました。これは東亜同文書院にとって幸運でした。というのも、「興学要旨」、「立教綱領」には中国人と日本人を教育するという方針が示されていましたが、資金難などで中国人の教育は実現が困難だったからです。したがって、中華学生部の設立により、中国人も教育するという理想が実現化したわけです。

東亜同文書院は中国政府と取り決めを結び、学生を毎年50名ずつ受け入れることが決められました。学生は中国側官庁や中国駐在の日本公館の推薦を受けた者たちがもっぱらでした。カリキュラムは予科1年、本科3年で、予科では日本語・英語・商業算術・簿記などを学びました。本科3年間は日本人学生と授業を受けました。しかし、折角開始された中国人教育でしたが、結論から言えば決して順調ではありませんでした。何故なら、学生達の多くが革命運動、民族運動に参加していったからです。

当時の中国は、第一次世界大戦期にナショナリズムが高揚します。1915年には日本が中国政府に提出した「21か条要求」に対する反対運動、1919年にはパリ講和会議で決定された、山東省にあったドイツ利権の日本への譲渡に反対す

る「五四運動」が起き、1920年代に入ると「五・三〇事件」が発生します。この五・三〇事件は、1925（大正14）年5月30日に発生したのものでそのように呼ばれているのですが、上海にある日本の紡績工場で待遇改善を要求する中国人労働者のストライキで工場側の弾圧により死亡者が出ました。これに抗議するために中国人たちが共同租界のメインストリートをデモ行進した際、イギリス人警官隊に発砲され、死傷者が出たという事件です。これにより反日・反英運動が高揚します。

こうした時代の中で、中華学生部の学生の多くは革命運動、民族運動に参加していき、左翼化する者も多くなりました。結局、中華学生部には全体で約400名入学しましたが、今申したように革命運動などに関わるなどして退学者が続出し、カリキュラムを修了して卒業した者は50名程でした。しかし、これにより東亜同文書院の日本人と中華学生部の学生との間で対立が生じたというようなことはありませんでした。むしろ、逆の現象も生じたのです。1927（昭和2）年頃、ある中華学生部の学生が孫伝芳という軍閥の家に爆弾を投げました。彼は逮捕され死刑宣告を受けたのですが、東亜同文書院全教員の助命嘆願運動の結果、死刑は免れ軽い罪に留まったといわれています。

こうしてみると、中華学生部を媒介とする東亜同文書院の存在は、中国近代史の一側面として捉えることができるのではないかと思います。

やがて、1930年代に入ると日中関係は悪化の一途をたどるのですが、1932（昭和7）年の第一次上海事変における東亜同文書院の対応について、次に見ていきたいと思っています。従来、満洲事変（1931〔昭和6〕年）と第一次上海事変は、関連性があるものとして捉えられてきました。つまり、1931年9月に満洲事変を起こした日本は、翌年3月に満洲国を樹立するのですが、欧米列強の耳目を満洲国樹立からそらすため、国際都市上海で軍事行動を起こしたといわれてきました。確

かに、国際関係の視点からはそのように説明することができますが、上海の日本人社会に焦点を当てると、違った様子が浮かび上がります。

当時、上海には約2万人の日本人が居住していました。この日本人社会には「会社派」と「土着派」という派閥が形成されていました。会社派とは、紡績会社や銀行などといった大資本層に属する人々です。一方、土着派とは所謂「一旗組」と呼ばれる人が多く、資本を余り持たない人々です。先行研究では1930年頃の日本人社会の構成について、5%ほどの会社派、40%ほどの中間層、残りの55%ほどが土着派であったと論じています。満洲事変後、上海では反日運動が展開されるのですが、それは従来のものよりも熾烈であったといわれています。例えば、日本人と取引しない、日本人に物を売らない、日本人に雇用されて働いている中国人には脅迫して辞めさせるなどのことがあったといわれています。

こうした中で、大資本層は経済的に余裕があるので何とか乗り切ることができるのですが、一旗組が多い土着派は資本も脆弱なので生活に困窮してしまいます。また、日本に帰ろうにも生活基盤がないため、引き揚げるわけにもいきません。したがって、この土着派の中から、中国と一戦を交えて状況を打開しようという好戦的な気運が現れます。そして1932(昭和7)年1月28日、第一次上海事変が勃発します。土着派を中心として多くの居留民が戦闘に参加するのですが、それを象徴する写真をご覧頂きたいと思います。これは「便衣隊」—平服を着て後方攪乱などを行う兵士のことですが—を捜索している写真ですが、日本軍兵士の背後に背広を着て銃を構え、腕に腕章を着けている複数の人物がいます。彼らはこのような形で戦闘に関わったわけですが(資料5を参照)。

このとき、日本人居留民側から学生を義勇軍として動員せよという要請があったのですが、大内暢三院長は引揚げを決断します。この措置によ

り学生の犠牲が出ることはなかったのですが、在留邦人の反感を呼び起こしました。1932年3月、東亜同文会より滬友同窓会支部宛て報告では—滬友同窓会とは東亜同文書院同窓会のことで、「滬」とは上海を指します—、「上海在留民中には書院の内地引揚げを目して在留民の安危を無視したる行動なりとて批議するもの多数有之候」と記されています。

このように、東亜同文書院が戦争に巻き込まれるのを避けたわけですが、しかし日中関係の悪化は避けられず、ついに1937(昭和12)年には日中戦争が勃発します。この時代の東亜同文書院—1939年に大学に昇格しますが—は、日中友好を理念としつつも戦争に協力せざるを得ないという、先行研究者の言葉を借りればジレンマに陥った時代でした。そうしたジレンマとしてまず挙げることができるのが、書院生による従軍通訳です。

戦争勃発直後の1937年9月3日、お手元のレジュメ4.(3)①の(a)にあるように、大内暢三院長は次のように諭告します。「(前略)我が忠勇義烈の兵と雖も、現地に入りては其の言語に通せず、また其の地理に暗きが為め多大の不便と支障を生ずる事無きや転た憂慮に耐へざるものあり。是に於てか、敢て第四学年諸子に告ぐ。…今日深くこの重大なる時局に鑑み、須く書院創立の精神を想起し、挺身奉公の至誠を致し、決然立って時難に赴く熱烈なる意気を有せらるべきを信じて疑わず(以下略)」。こうして4年生が従軍通訳として戦地に赴き、うち1名が戦死を遂げました。

さて、大内院長の諭告を見ると、軍国調で表現されており、当時の時代の影響を反映しています。しかし、かつての第一次上海事変では学生の戦闘参加を防ぎ引揚げを断行した彼が、諭告を発した意図や心境はどのようなものだったのでしょうか。それを窺い知ることができる資料を、同じくレジュメ4.(3)①の(b)に引用しておきました。「…軍方面からの軍事通訳出動要請に対し大内院長は大変苦慮された由である。しかし、“軍事通訳に



出動することは、日本軍のためだけでなく、むしろ中国民衆のためになる”との理由で通訳従軍を決断されたようである。…」。日中友好を志しつつも、時代の流れの中で、戦争に協力せざるを得ない立場に置かれた大内の、ジレンマに満ちた胸のうかが窺えます。

そうした中で、1939（昭和14）年12月東亜同文書院は大学に昇格し、名称も「東亜同文書院」から「東亜同文書院大学」に変わりました。この大学昇格は戦争中における東亜同文書院を考える上で大事な点であると思います。つまり、戦争中になぜ大学昇格を果たしたのか、その意味は何か、が大事になるのですが、従来この点については殆ど研究されてきませんでした。この市民トラムの最後を担当される大島先生がお話になると思いますので、私の方からは敢えて申し上げません。従いまして、お手元のレジュメにも大学昇格は記載してありません。しかし、戦争と東亜同文書院を考える上で重要な問題であることを指摘しておきます。

さらに、1943（昭和18）年には学徒出陣が行われ、翌1944年から1945年にかけて勤労働員も行われるようになります。この勤労働員では、1944年12月に江南造船所がB29の空襲を受け、学生6名が爆死するという痛ましい出来事もありました。こうした中で、日本は敗戦を迎え東亜同文書院大学も閉校となったのであります。

日中戦争期の東亜同文書院（大学）は、日中友好を理念とした学校が戦争に巻き込まれていったこと、そして戦争という国策に協力せざるを得なかったというジレンマに陥った状況であったといえることができます。

最後に、近代史における東亜同文書院の位置付けについて、まとめておきたいと思います。しかし、40数年にも及ぶ歴史を一言で述べるのは困難です。したがって、何点か指摘してまとめたいと思います。

まず、東亜同文書院は中国—当時は清国でしたが—の理解と協力のもとで誕生しました。また、創立後も創立二十周年・根津院長還暦に書が中国の要人から贈られたり、隣接する交通大学との学生同士の交流が行われるなど、中国人との交流は長く続きました。しかし、日中戦争の時代になると、国策に従わざるを得なくなります。こうして見てみますと、東亜同文書院は近代日中関係史と表裏一体とはいかないまでも、かなり密接な関係であり、日中関係史の流れをかなり反映していたといえます。また、中国近代史、日本近代史という個別の歴史分野においても、東亜同文書院の存在というのは決して小さいものではなかったといえることができます。

例えば、中華学生部の学生の多くが革命運動に関わっていったことはお話ししましたが、それは近代中国に、中華学生部を中心として東亜同文書院が関わっていったことを意味するといえます。また、第一次上海事変による書院の長崎引揚げは、戦闘行為に参加を迫る居留民の反発を招きましたが、書院のこうした姿から、近代日本の意識や姿を垣間見ることができるのではないかと思います。

もちろん、東亜同文書院は戦争中には中国侵略という国策に協力させられたのであり、こうした限界は否定できないと思います。しかし、では東亜同文書院が日本内地と同じくらいに完全に軍国主義に染まっていたのかというと、必ずしもそうとはいえないと思います。例えば、東亜同文書院で軍事教練が開始されたのが1938（昭和13）年ですが、内地では1925（大正14）年に中等学校以上で開始されています。また、戦争中でも東亜同文書院の図書館ではマルクス・レーニンの著作が閲覧可能だったといわれています。そして、当時の東亜同文書院の意識を示す事例として、江南造船所での学生の爆死に対して小岩井淨がとった行動を挙げることができます。小岩井は当時東亜同文書院大学教授で、戦後は愛知大学第3代学長

に就任しますが、東亜同文書院大学最後の学長で、戦後は愛知大学第2・4代学長を務めた本間喜一の追想文に記されていますので、ちょっと読んでみます。

「数日の後小岩井先生から「学徒勤労隊の造船所行きは中止、引揚命令を出した。その結果に対しては自分が全責任を負う」との電報を受取ったことであった。(中略)果たして上海海軍武官府、上海大東亜省文化部から強硬な抗議を受け、蔭では同文書院をツブシてしまえという話しさえ出たとの噂もあったが、交渉に当った小岩井先生の学生教育の真摯な態度、愛情、誠意が人の心を打つものがあつたろう、海軍武官府もようやく了承したとのことであつた。(後略)」(小岩井浄追悼特集号編集委員会編『愛知大学新聞 小岩井浄追悼特集号』71頁、愛知大学新聞会、1960年)。

当時としては非常に勇気がある決断だと思えますが、こうした行動がとれた背景には自由主義的な考えが存在していたということができないのではないかと思います。

もう1つご紹介します。1945(昭和20)年4月、学生たちが寮の中でファイヤー・ストームをやるのですが、寮の一階に駐留していた兵隊が「静かにせい」と注意に来たわけです。それに対して学生がなんと言ったかといいますと、「われわれは別に酒を呑んでいたわけでもないし、この言葉を聞いて黙って引き下がる気持ちにはなれない。「ここは書院ですよ、兵舎じゃないんだから、僕たちはあなたに命令される必要はないんです。その上になんですか、天皇陛下まで引っ張り出してきて」(大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』663頁、滬友会、1982年)と言うわけです。

小岩井や学生のこうした言動は、上海であったからこそ取れたものであり、また東亜同文書院の

性格を示しているのではないかと思います。戦争中は軍国主義という時代の大きな制約があり、学校も軍国調になっていきましたが、しかし完全に染まったのではなく、一方でリベラル・自由主義的な考えが存在したのも事実といえるのではないのでしょうか。

こうした書院の個性、カラーを掘り下げて書院の思想として捉え、そこから近代日本の思想、戦争や軍国主義、近代日中関係史というものを捉え直すことができるのではないかと思います。今回はそこまでお話できませんでしたが、また機会がございましたら研究を深め、改めてご報告させて頂きたいと思えます。

皆様、ご清聴有難うございました。

**【質問者】** 当時、上海には東亜同文書院のような他国の学校はあったのですか？

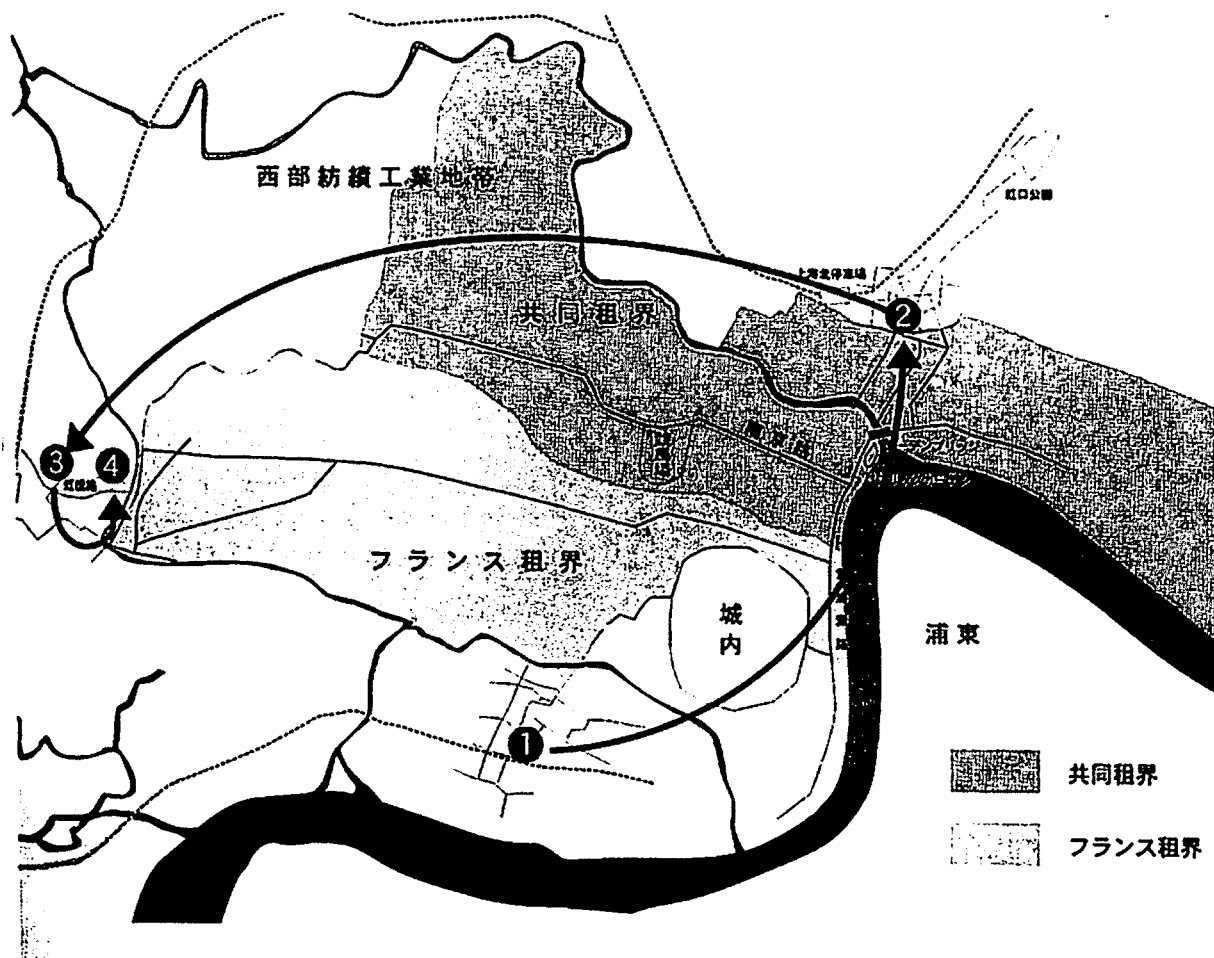
**【武井】** 欧米の学校がありましたが、ミッションスクールがありました。アメリカやイギリスのミッションスクールはありました。

**【質問者】** レジュメの最後に載っている参考文献は、図書館で閲覧することはできますか？

**【武井】** はい、殆ど全て図書館に入っているはずです。また、記念センターにはこれらの図書がありますので、そちらにお越し頂いてご覧頂くこともできます。

※ 本報告は、当日録音を録らなかったため、報告者が後日メモと記憶を頼りに作成したものである。そのため、多少表現が異なったりする部分があるが、講演の主旨に大きな影響はない。また、当日はOHCを使用して多くの写真、資料を映し出したが、その全てを掲載すると煩雑となるため、ここでは必要最小限に留めた。





- ① 桂墅里校舍 (高島廟)
- ② 赫司克而路仮校舍 (閘北)
- ③ 虹橋路校舍 (徐家匯)
- ④ 海格路臨時校舍 (徐家匯)

上海での書院キャンパスの移動

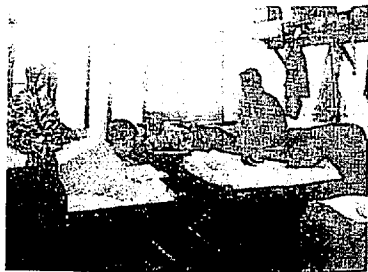
資料1 東亜同文書院(大学) 校舎の変遷図  
 出典)「愛知大学東亜同文書院大学記念センター収蔵資料図録」11頁  
 (愛知大学東亜同文書院大学記念センター編集・発行、2005年改訂版)。

職名	担任	学位	氏名
院長	憲法及法学通論、商法	法学士	近衛文麿
副院長	英 語	法学士	岡上 梁
教授	財政学、民法、交通論 商品学、支那時事研究、 業地理、支那経済事情 英語、商業通論 商業算術、保険論	法学士 東亜同文書院商學士 マニラ コロンビア コンファイ	坂本 義孝 林 源三郎 馬場敏太郎 小崎 乙彦 和田 喜八 藤原 茂一 山田 謙吉 大串 哲雄 有本 邦造 森沢嘉五郎 高橋 協
同	英 語	東亜同文書院商學士	高橋 協
同	哲学概論、漢文 為替、銀行及金融、商業政 策、工業政策、統計学為替 簿記、会計学	山口高商出身 東亜同文書院商學士	森沢嘉五郎
同	中華学生、日本語	東亜同文書院商學士	高橋 協
同	支那 語	東亜同文書院	鈴木 沢郎
同	在東京研究中	東亜同文書院	大谷幸太郎
同	欧米研究在留中	東亜同文書院	久重福三郎
同	支那経済事情、商工経営、 貿易実務、商業通論	同	久保田正三
同	経済原論、簿記、倉庫論、 取引所論、経済学史、貨幣 論	東亜同文書院	穂積 文雄
同	支那 語	東亜同文書院	熊野 正平

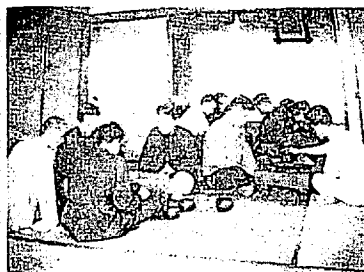
〈教授陣〉

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
支那史、支那思想史、支那 制度、支那時事研究	支那 語	北京在留研究中	支那 語	支那 語	支那 語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語	中華学生日本語
支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語
支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語
支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語	支那 語

資料 2 1930 (昭和 5) 年頃のカリキュラム表  
 出典) 大学史編纂委員会編「東亜同文書院大学史」  
 132 ~ 133 頁 (滬友会、1982 年)。



寢室



碁打ち



喫茶室

資料3 学生生活の様子を撮影した写真

出典) 安澤隆雄著『愛知大学東亜同文書院ブックレット① 東亜同文書院とわが生涯の100年』  
(愛知大学東亜同文書院大学記念センター編、あるむ発行、2006年)。



資料4 (上) 梁啓超書 (下) 黎元洪書

出典) 前掲『愛知大学東亜同文書院大学記念センター収蔵資料図録』9頁。



資料5 第一次上海事変における便衣隊捜査の写真  
出典) 上海居留民団編『上海事変誌』(1933年)。